製品化・実用化事例

人材育成
設備使用
技術相談
共同研究
研究会

陶芸技術者専門研修などを通した笠間焼の製品化支援

支援先

ちどり窯、西山すみれ、佐野圭、李愛琳、笠間焼協同組合

【支援の背景】

当センターでは、陶磁器成形技術や釉薬技術など、笠間焼の窯元や陶芸家からの様々な技術相談に対応しています。相談内容に応じて陶芸技術者専門研修によるスキルアップや企業連携のコーディネートなどを実施し、課題解決や新製品開発を支援しています。

ここでは、令和５～６年度に行った支援の結果、製品化された事例を紹介します。

【開発の経緯・支援内容】

図１　「マット釉しのぎカップ」（支援事例①　製品例）

図２　「ボウルＳ -drip-」（支援事例②　製品例）

図３　つながるマルシェ販売風景（支援事例②）

＜支援事例①　ちどり窯（加藤亜弥）＞（図 1）

ちどり窯の加藤氏は、笠間市内の工房などで修業しましたが、これまで釉薬の理論を学ぶ機会がなく、基礎知識が不足していると感じていました。笠間焼作家として独立を前に、釉薬に関する基礎知識を充実させ、さまざまな釉薬を開発できるようになりたいと相談がありました。

そこで、陶芸技術者専門研修により、釉薬と関連技術（焼成技術や素地物性など）に関する座学や実習を指導しました。また研修終了後も、実験方法や焼成条件などについて提案や支援を行いました。

これらを通して修得した釉薬である表面の光沢感や透明感を抑えたマット釉を用いた製品は、自身初の本格的なグループ展「シェアアトリエ３人展」（久野陶園、R6.4.27～5/6）で販売を開始しました。

（製品例）　名称　マット釉しのぎカップ
　　価格　1,980 円（税込）

＜支援事例②　西山すみれ＞（図 2、3）

西山氏は、令和３年３月に陶芸学科卒業後、笠間市内の工房で修業しました。笠間焼作家として、イベントや展示会への出品などの活動を本格化するため、オリジナルの釉薬や化粧のバリエーションの幅を広げたいと相談がありました。

そこで、陶芸技術者専門研修を受講していただきました。具体的には、陶芸学科在籍時に研究し、卒業制作などに用いた白化粧土や白マット釉をベースとして、発色などの外見や表面の質感の改良を試みたいとの希望をふまえた内容の研修指導を行ないました。

研修成果による製品を笠間市内のギャラリーにおけるイベント「つながるマルシェ」（まちのベンチ、R6.5/2～3）で販売を開始しました。現在、うつわや季器楽座（水戸市）など、多くのイベントや展示会・ギャラリーで販売しており、笠間焼作家としての活動を広げています。

（製品例）　名称　ボウルＳ -drip-
　　価格　3,300 円（税込）

図４　「やまおとこ」
（支援事例③　製品例）

図５　伊勢丹新宿店での販売風景
様々な釉薬を用いた「やまおとこ」
（支援事例③）

＜支援事例③　佐野圭＞（図 4、5）

佐野氏は、令和 5 年 3 月に陶芸学科卒業後、笠間長石※を用いた釉薬での試作・制作に取り組んできました。いくつかの展示会や陶器市で経験を積んできましたが、作品の幅を広げるため、笠間長石※を主原料とした新たな釉薬を開発したいと相談がありました。

そこで、陶芸技術者専門研修により開発を支援しました。「これまでの研究により得られた釉薬をベースにしながら配合改良を行ない、微細な凹凸を持つマット釉を開発したい」「一方で、それにこだわらず新釉薬を開発しバリエーションを広げたい」という要望に応じたオーダーメイド型の研修を実施しました。

この研修によって得られた微細な凹凸を持つマット釉を使って、制作に取り組みました。「CURIOUS COLLECTIONS」展（R6.10/2～8、伊勢丹新宿店）など、いくつかの展示会・イベントで販売を行なっております。研修で得られたその他の釉薬技術についても研究を続けており、製品化の支援を継続しております。

（製品例）
名称　やまおとこ
価格　44,000 円（税込）～

※笠間長石（かさまちょうせき）：令和 3 年度の笠間陶芸大学校との共同研究の成果により、笠間焼協同組合が販売を開始した笠間産資源（稲田石の微粉末）による新たな陶磁器原料

図６　「butterfly bowl」
（支援事例④　製品例）

図７　イロジカケ販売風景
（支援事例④）

＜支援事例④　李愛琳＞（図 6、7）

李氏は令和６年３月に研究科卒業後、陶芸作家として起業しました。イベントやグループ展など笠間焼作家としての本格的活動の開始に際し、不足している技術について相談がありました。

研究科在籍時には、鋳込み泥漿（でいしょう）技法による磁器成形を中心に課題に取り組んでいましたが、起業して間もないため鋳込み成型に必要な機材が不十分で、当面は機材に頼らない簡便な方法で成形をせねばならず、対応する技術について指導してほしいとの要望がありました。

そこで、下記の内容で製品化支援を行ないました。

・設備利用による石膏機材の利用案内と指導
・機材に頼らない金物製品（バケツ等）を利用した泥漿製作・管理指導
・鋳込み成型に必要な用具、作業工程の指導

これらの支援成果による製品を水戸市内のギャラリー（泉町ギャラリー「窯(YOO)」）での展示会「イロジカケ」(R6.7/13～21）などで販売しました。

（製品例）
名称　butterfly bowl
価格　3,000～6,000 円（税込）

図８　モンブラン用ケーキ皿
（支援事例⑤）

＜支援事例⑤　笠間焼協同組合＞（図 8、9）

当センターと笠間焼協同組合は、笠間長石などの笠間地域の資源を活用したモノづくりのための技術開発や、地域ブランディングに取り組んでいます。

笠間市は、国内有数の栗の産地です。栗を生産する過程で出る剪定枝は焼却され灰（栗灰）となりますが、これも釉薬原料として重要な地域資源であると言えます。そこで、令和５年度からは、笠間長石と栗灰を組み合わせた「栗灰釉」の共同研究に取り組んでいます。

令和５年度には、栗灰が釉薬原料としてどのような特徴を持つか（釉薬の色や釉薬表面の質感などにどのような影響を与えるか）を調査することに重点を置いた釉薬試験を行ないました。この試験を通して、製品に展開可能な釉薬レシピがたくさん得られました。

この成果を活かし、道の駅かさまフードコート内カフェ「楽栗 LaKuri」において、人気メニューであるモンブランを提供する平皿に「栗灰釉」を用いた笠間焼を使用することを提案し、採用されました。令和６年 11 月から、組合員（河野カイ氏、小林哲生氏、酒井敦志之氏、佐藤剛氏、武伸也氏）が制作した栗灰釉笠間焼７種類が使用されています。

（いばらきデザインセレクション 2024　「選定」）

モンブラン用ケーキ皿を含め、笠間長石と栗灰を組み合わせた「栗灰釉」に関する地域連携の取組は、いばらきデザインセレクション 2024 において、選定（ソーシャルデザイン部門）されました。

笠間の地場産業「笠間焼×稲田石×栗」や地域原料「笠間長石×栗灰」のネットワークを活かした地域ブランディングを目指す活動が評価されました。

案件名称：笠間長石×栗プロジェクト
応募部門：ソーシャルデザイン部門
応募者　：笠間焼協同組合、笠間陶芸大学校、笠間市、一般財団法人笠間市農業公社、有限会社関東稲田砕石

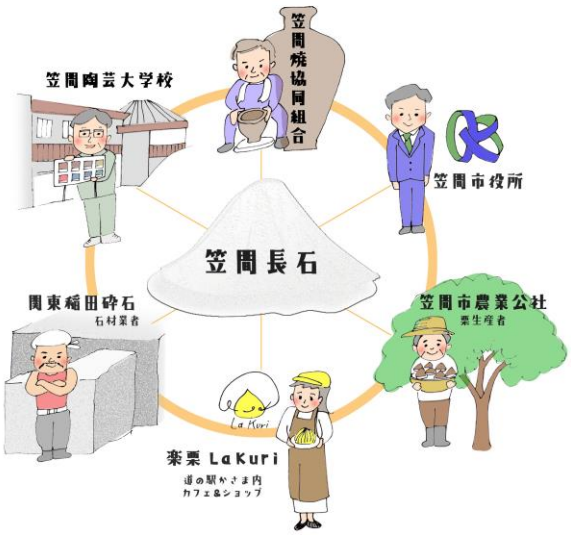

図９　笠間長石×栗プロジェクトのイメージ

基礎となった事業	令和５～６年度　陶芸技術者専門研修 令和５～６年度　維持運営費（技術相談、設備使用） 令和５年度　オンリーワン技術開発支援事業（共同研究）			
担当グループ	窯業技術Ｇ	グループ長	尾形　尚子	TEL:0296-72-0316
		首席研究員	児玉　弘人	
		主任研究員	吉田　博和	
		主事	郡司　恋緒菜	
	陶芸人材Ｇ	グループ長	常世田　茂	
		特命教授	佐藤　雅之	
		会計年度職員	根本　達志	
		会計年度職員	新島　佐知子	